
目覚めたらファンタジーな異世界でした。

雨と傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

【Zコード】

Z5353V

【作者名】

雨と傘

【あらすじ】

書き直した話から投稿していきます。目が覚めると、私の知らない世界だった。そこは魔法、エルフ、獣人、モンスター、ドラゴン…が存在する世界。そんなファンタジーな世界で研究者で魔術師な人に拾われました。なぜか体が小さくなつていて、ちょっと困ります。4歳に逆戻りしてしまった主人公・ハルキがファンタジーな異世界で生きる話。

寂しい場所

真っ白い世界

どこまでも白くて白い世界
大地と空の境目などなく
風も吹かず、音もなく
冷たさもなく、暑さもなく
光もなく、影もない
そんな世界にその人はいる

白い髪

白い肌

白い服

白に満たされた世界で紅い唇を微笑みの形に歪ませて笑うのだ

私達の間にはなにもない

言葉も感情も思惑もなにもない

それでも彼女は笑う

私は…私は？

そして私は目覚ましの音で目を覚ます

体を起してあの白い場所が夢なのだと思い出す

そしていつも私は思うのだ

あそこは寂しい場所だと

プロローグ＝はじまり

だんだんと暗くなつていく森。纏わりつく風は冷たい。
遠くに聞こえる狼の遠吠えに恐怖が甦る。

怖い、寂しい。

ぽろぽろと涙が頬を伝う。

膝からは血が流れている。

ズキズキと痛み、それが恐怖に拍車をかける。

誰もいない森の中。

薄暗い森の中。

一人ぼっちの森の中。

一人は寂しい。

一人は怖い。恐いよ。

恐い、怖い、寂しい、いやだ。一人はいやだ。

いやだ、いやだよ。

ねえ、だれか…たすけて。

「なんで、こんな所に子供がいるんですか。」

光が、茧のように飛んでいる。

淡い金色の光が、ふわふわと舞う。

その人は私を抱き上げて、大丈夫だと言つてくれた。
暖かさを感じながら、私は眠りへと沈んでいく。

涙が一筋、零れていった。

第1話：人生なにが起こるか分からぬ

誰かが言っていた。人生なにが起こるか分からないものだ。

私もそう思う。同感だ。

未来は誰にも分からぬ。だけど、なんとなく想像はしていた。
高校を卒業して大学に行つて就職して恋愛なりお見合いなりして
結婚するのだろうと。

子供は出来れば3人ぐらいで老後は田舎でゆっくりと過ごして子
供や孫やできればひ孫に囲まれながら大往生…そんな人生だつたら
言つ事なしだつた。

自分が人を好きになるなんて想像できないけど。刺激的な人生が
欲しかつたわけではない。

だけどもう一度言おう。人生なにが起こるか分からない。

とりあえず私の身に起こつた出来事をかいづまんと説明しよう
学校の帰り道に貧血を起こして倒れて気が付いたら森の中にいて
なんか狼っぽいのに追いかけられて美形な研究者で魔術師な転生者
に拾われました。まる。

わけが分からぬが、これが私の身に起こつた事だ。詳しく説明していこうと思う。

私はショッちゅう貧血を起こす訳ではないんだけど、たまになる
んだよね貧血。遅刻しそうになつて朝ごはん抜いたのが原因だと思
うけど。朝ごはん食べればよかつたと後悔しながらブラックアウト。

で、気が付いたら森の中にいました。

狼っぽいのは シーザ というモンスターだそうだ。三つ目…つまり額に第3の目があるモンスター。

毛色とかは私の知っている狼なんだけど、額に目があつて怖かつた。

しかも群れで追いかけてくるから怖かつたよ。

そこを美形な研究者で魔術師な転生者のフェイ・クルーネクスに拾われた。

私は親しみを込めてフェイさんと呼んでいて、綺麗な人と間違えそうなほど綺麗な人だけど男だ。ベージュのよつな優しい色の髪と目をしている。

聞いたことないから推測だけど歳は20代後半。

そして、前世の記憶がある人だ。

たぶん前世は私と同じ所。いろいろと共通点があつたし、間違いないと思う。

フェイさんにはいろんな事を教えてもらつた。

ここが私がいた場所とは違う事。

エルフ族や獣人族といった種族が存在する事。

魔法という力が存在する事。

そして私の体が小さくなつてているという事。

驚きや戸惑いもなく、それは事実としてストンと胸に落ちた。

フェイさんは私が取り乱したりすると思つていたらしく、ちょっと驚いていた。

体が小さくなつていたのはちょっと困つたけど。ちょっと困つただけだつた。

ちなみにフェイさんは光を操る魔法を使える。

実際に見せてもらつたけど、とても不思議でとても綺麗だった。私にも使えたらしいなつてフェイさんに言つたら、今度魔力を調べる道具を持ってきてくれるそつだ。

魔力は魔法が使える力で、魔力があると魔法を使えるんだって。ちょっと楽しみ。

以上が私の身に起つた事。本当に人生なにが起るのか分からぬよね。

あつちの世界で私がどうなつているのか気にはなる。だけど寂しいとか未練はない。

あつちより危険が多い世界だけど、帰りたいとは思わない。来てしまつたのは仕方が無いと思うし、過去に戻れる訳でもないから。どうして私なんだろうなーつていうのは気になるけど。

そんな私はフェイさんの家で家事とかをこなしながらこの世界の事を教えてもらつている。

いや、家というよりは屋敷といったほうが正しいかもしね。森に囲まれた屋敷。

体が小さくなつて動き辛いけど、これはこれで新鮮。
河原春樹 16歳。4歳になつてしましましたが、楽しくやつています。

第2話・胸がきゅうつするのむ

フヨイさんが真剣な面持ちで紙に書かれた文字を読んでいる。
私は緊張しながら結果を待つ。
刻々と時間が流れる。

「…うん、問題はないですね。」
「やったー！」

思わずガツッポーズ。よかつた、やっと終わった！

「またか3ヶ月で書けるようになるとほ思いましたよ。」

今、私がフヨイさんに教えてもらっていたのはこの世界の言葉の一つ。シェイア公用語。この世界ではほとんどの人が使える言葉だ。

「んー、頭の中にある知識と照らし合わせながらだから書けるようになるのが早かったのかも。」

「なんて言つか…ずるいですよ。私はこの世界に来た時は言葉が全く分からなくて苦労したのに。」

「不思議だよね。私はこっちの言葉を知らないのに話せるし読めるなんて。まあ、シェイア公用語だけだけど。」

「それだけで十分ですよ。」

「うう、なんでか分からないけど私は「」の言葉が話せるし読める。

今フロイさんに教えてもらっていたのはショイア公用語の文字。読めるんだけど書けるようになるまで3ヶ月かかった。

「でも、自分の知らない言葉を当つ前のように使えるのは変な感じ。ちょっと怖いかな。」

「…まあ、「ラシキーだと思つておけばいいですよ。
それより、紅茶が飲みたいです。そろそろお茶にしましょうか。」

フロイさんは紅茶が大好きだ。一日に何回も飲む。むはや紅茶中毒と言つてもいいと思つ。

「私は砂糖入れてね。」

「何言つてんですか。ハルキも手伝はせんんですよ。」

「えー、4歳児に手伝わせるんですかー。」

「中身は16でしょ。」

「」に来て3カ月とちょっと。

軽口も言ひ合えるよになつた。それが嬉しい。あつちでは、そんなこと出来なかつたから。

胸がきゅつとなつて、温かい。

胸がきゅつて苦しくなるのは、悲しい時だけじゃないんだね。

「…? どうかしました?」

「なんでもない!」

..『あつひ』『ひじり』『ひ

「ねーねー、フェイさん。」

「なんですか。」

「ちょっとと思つたんだけど、前の世界の事を『あつち』って言つてこの世界を『いづち』って言つてゐるよな。」

「…もう二度と来ませんわ。」

混乱しない?

「ことのいふやう」

絶対する」で!! 提案なんだけど

なし

「……そのまんまじやないですか。」

結局、私が考えた案は使われなかつた。理由はややこしいから。
いこと思つんだけどな、『科学世界』と『魔法世界』。

第3話・初めての外（一）

それは半年がたった頃。始まりはフュイさんの薬葉だった。

「ハル、インクがどこにあるのか知りませんか？」

「知らないけど…インク切れたの？」

「そうなんですよ。仕上げないといけない資料があつて。困りましたね。

…そうだ、明日『市場』に行つてみませんか？」

「市？それって私が知つているのと同じ？」

「同じだと思いますよ。いろんなものを売つている場所です。ハルキは外に出たことないでしょ。」

「…そういうえば森の外に出たことない。」

よく考えたら街とかに行つたことがない。食料とかは運んできてもらつてるし。庭広いし、散歩なら森を歩けばいいし。

「ね。行つてみませんか？」

用事があるから、ついでに見て回つましちょう。」

「うん、いいよ。」

そんなこんなで、初めての外出決定。
…ちょっとめんどいと思ったのは秘密。

第4話・初めての外（2）

第一印象は『賑やか』だった。

すらりと簡易な店が並んでいて、人の声が溢れている。見た所、食べ物を売っている店が多いみたいだ。屋台っぽい店もある。いい匂いだなー。

「フロイさん、いい匂いがするね。」

「こつもじさん感じですよ。」

「へー。」

私の今の恰好は田深に帽子をかぶって、シンプルな半ズボンをはいでいる。帽子の中に髪を全部入れていてから男の子に見えると思う。

フロイさんが言つには黒眼は珍しいから、隠しどけだそつだ。

「とつあえず、用事を済ましてから見て回つてしましちゃう。」

「賛成。」

フロイさんに手を引かれて歩き出す。いつも通りげなく手を引いてくれる所が優しいと思つ。

「フロイさん、あれなんですか？」

「あれは『リマム』といつ葉物野菜です。

苦味があります。」

「じゃあ、あの呪のじてあるのな?」

「『ハシュムル』です。

南の方で獲れた魚を干したもので、『ハシュムル』は魚を干したもののが総称です。

この辺りは海が遠いですから、新鮮な魚介類が手に入りにくいんですよ。

その代り、森や草原などが多い。

だから新鮮な野菜や果物が多いんですね。」

「へー。」

どれも初めて見るものばかりで楽しい。

知らないものばかりで、質問ばかりしつづけ。

「…ああ、ここのですね。」

綺麗な柄の布が並べられている店の前で止まる。ほかには食器や本が数冊山積みにされていてたり、色々な物が置いてある。

「なんか、『じゅわじゅわ』している店ですね。」

「雑貨屋みたいなものですよ。

いませんね。…おーい！」

フヒイさんが大きな声を出すと、店の奥から物音がした。のそのそと大きい影が歩いてくる。

「ほーほー、なんのこ用ですか…。」

店から出てきたのは、熊みたいなおじさんだった。

第5話・初めての外（3）

「ん？」

店から出てきた男は私達を見て、訝しげな顔をした。だけど、次の瞬間にには凄く嬉しそうな顔になつた。

「おー！ フェイじゃねえか！
ひつさしふりだなー！ 元気にしてたか？」

店から出てきた男は豪快に笑いながらフェイさんの背中をバシバシと叩く。

なんか、熊みたいな人だ。

頭には布を巻いているから、工事現場のおじさんみたい。

「ん？ お嬢ちゃんは坊主の連れか？ めつずらしいなー！ お前が誰かとここに来るなんて。初めてかもしけんぞ！」

おじさんがしゃがんで田線が同じ位置になる。

あれ、この人耳が長くて尖つてゐる。

それに布の間から見える髪の毛が緑色だ。
もしかして…。

「お嬢ちゃん、名前はなんだ？」

これ、答えた方がいいのかな？
ちらりとフェイさんを見たら頷いた。

「…ハルキ。フニイちゃんにはハルって呼ばれてる。」

「おーそつなのか。歳はいくつなんだ？」

「…4歳。」

「そつか、4歳か。しつかりしてんなー！
村の悪ガキどもに見習わせたいぐらにだ。
ちゃんと答えられた良い子こはこれをやつてー。
ほーれ、手を出せ。」

慌てて手を出すと、手のひらに口ロ口ロと丸い物が落ちてきた。
なんだろ？、これ。色は茶色で、クッキーみたいだ。

「フニイさん、これなに？」

「『クク』とこつお菓子ですよ。」

「女房が作ったやつだ。絶対うまいから一回食べてみるってー。」

女房ってことは奥さんいるんだ。

『クク』はほのかに甘いにおいがするから、甘い物なのだつ。

おれるおれる口に入れてみる。

「どうだ？」

「…おいしい。」

口の中でほろほろと崩れる。

せん苦くて、口アミみたいな味だ。

「やつかやつか！そりゃあよかつた！」

お礼とか言つた方がいいよね。

「…おじさん、ありがと。」

「びーいたしまして！」

ベーいや、まだ名前言つてなかつたな。
俺の名前はジエイジだー！」

「ジニアードやん？」

「ちゃんと付けなくてこ’れ～。」

「じゃあ…ジニアードおじさん？」

「おーいーな、やのジニアードおじさんってこと。」

ぽむぽむと頭を撫でられて、ちゅうと顔子がずれたと困つたりジエ

イドさんが直してくれた。

なんか恥ずかしい…嬉しそうもあるんだがど。

第6話・初めての外（4）

「…鼻の下伸ばしていないで仕事してください。」

「おー、悪いな。で、なにが必要なんだ？」

フロイさんを見ると、ムスッとしていた。
ジョイドおじさんはちょっとニヤニヤして、「…
…なんで？」

「こつものインクを多めに。」

「了解。ちょっと待つてる。」

ジョイドおじさんが店の中に入つていぐ。
出てきたと思ったたら、小さめの木箱を持っていた。

「ほー、これでいいか？」

「はー、大丈夫です。」

そういうと、フロイさんはジョイドさんに何かを渡した。
よく見えなかつたけど、お金だと思つ。まだ知らないから、教え
てもらわないとな。

「ちよつと市場を見て回るんで預かっておいても構いませんか？」

「ああ、いいぞ。見て回るつてことはハルキは市は初めてか！」

それなら、あつひの広場で面白こののがあるわ。」

「やうなんですか。行ってみましょうか、ハル。」

「うそ。」

また後で、ヒジヒイドさんと分かれて歩き出す。
画面このつてなんだら。

第7話・初めての外（5）

店からだいぶ離れた。

ちょっと疑問に思つた事を聞いてみる事にした。

「ねー、フヨイさん。

ジヨイドさんつてもしかして『エルフ族』？」

「…あれ、ハルにエルフのこと教えましたっけ。」

「ううん、まだ教えてもらつてない。

だけど、本でちょっと読んだ。」

「そうですか…。

本つて事は、もしかして『あの部屋』の本じゃないですよね？」

「え、ダメだった？」

「いや、ダメというわけではないんですが。

危ないですから、今度からは私に一言言つてからにしてください。」

「

「はーい。で、ジヨイドさんは『エルフ族』なの？」

「そうですよ。」

「やつぱつ。だけど、エルフって色白で細いイメージがあったから

ちょっとびっくり。

挿絵のエルフもそんな感じだったし。

」

「まあ、 そうですね。

エルフにもいろんな人がいますよ。」

「へー。」

第8話・初めての外（6）

広場に着くと、沢山の人気がいた。軽やかでリズムの良い音楽も聞こえてくる。

なんか、面白そう。だけど、人で見えない。いつこいつ時体が小さいと不便だなー。

「ハル、見えないでしょ？。抱っこしましょつか？」

「うーん。」

抱っこしてもらえば見えると思うけど…。

むー、と悩んでいると今の私と同じくらいの子供の声が聞こえた。父親らしき人に肩車をしてもらつて、わやわやと笑っている。

…あ。

「フハイさん、肩車して。」

「肩車ですか？」

「うん、肩車。

肩車やつた」とないから、やつてみたい。」

「いいですよ。」

フハイさんに両脇を抱えられて、肩に乗せられる。

…私、しゃがんでもらって肩に乗つかるのをイメージしてたんだけど。

「どうですか？」

「すごい高い。」

景色が一転した。

見上げていた物が、下の方にある。空が近くで、風が気持ちいい。ちょっと不安定だけど、フェイさんが支えてくれているから大丈夫。

目線が高くなつたおかげで、見えなかつたものが見えるようになつた。

人の中心で女人人が踊つてゐる。腰には長い布を巻いていて、踊るだびにひらりと舞う。

後ろにはトコトコと太鼓に似た楽器を叩いている人がいる。そして周りにキラキラと水が舞つてゐる。

踊り子が舞うたびにサラサラと動いて、きれい。

「すごい。あれがジェイドおじさんが言つていた、面白い物？」

「そうですよ。

『人魚の舞』という踊りです。

元々は雨乞いや荒れていの海を沈めるなどの『水』に関係する儀式でした。

ですが今では踊りの一つですね。

ここからでは見えないですけど、踊り子の腰に巻いてある布は鱗の模様なんですよ。

それで、人魚を表しているんですね。」

「へー、そうなんだ。」

太鼓の音がだんだんと早くなつていいく。
それと同時に踊りも早くなつて、水の動きも早くなる。
くるくると水が舞う。水中で人魚が舞う。

無性に、人魚という存在に会つてみたくなつた。

第9話・初めての外（一）

『人魚の舞』が終わると、私達はいろんな所を見て回つた。
アクセサリー屋みたいな店には若い女の子がいて、あちこちでおばちゃんが話していた。

屋台のおじさんはちょっと顔が怖かつたけど、売っていたお団子つぽいものはとてもおいしかった。

歩きまわつて、食べて、たくさん話して笑つて。とても楽しかつた。

歩き疲れてしまつて、今はフュイさんに抱っこしてもらひついている。瞼が重くなつてきて、眠くなる。

「ハル、眠いんですか？」

「……うん。」

「寝てもいいですよ。」

「……うん。」

ひとり、と眠気がやつてくれる。

「おやすみ、ハル。」

優しいフュイさんの声。暖かい腕はなんだか安心する。柔らかい眠気に誘われて、私の意識は沈んでいった。

side・フェイ・いつか、離れてしまひ

腕の重みが少しだけ増した。ハルの顔を見れば、すやすやと眠っている。今日は歩きまわったから疲れたんだろう。

ハルが来てからもうすぐ4ヶ月。

ハルは凄い早さでこの世界の知識を吸収している。教えている時のハルはとても楽しそう。興味深々、という顔をしている。

それで教えるのが楽しくて、沢山の事を教えてたくなる。

恐らく、ハルは私と同じ世界から来たのだろう。
私は一度死んで、この世界に生まれた。

その事実が受け入れれなくて、昔は全てを拒絶していた。残してきたものを想つて、泣いた事もあった。

あいつに出会つていなければ、まだ世界を拒絶していたのだろう。
…もしかしたら、世界を壊そうとしていたかも知れない。
…けどハルは世界に戸惑う事もなく拒絕する事もなくただだけ受け入れた。

体が幼くなつていてることも知らない言葉が分かる事も受け入れた。
元の年齢は16だと黙っていたが、大人びていると思う。
…いや、大人びているのではない、達観している。諦めているようにも感じた。

「あー、寝ちまつたのか。」

「疲れたみたいですね。」

眠る顔は安心してこるよりも見えて、信頼されてこると細いつと嬉しい。

「しかし、お前が人を連れてくるなんて驚いたぞ。
しかも仲良く手を繋いでなんてな。
…ハルキは、お前の家に住んでるのか？」

「はい。」

「そうか。お前が傍に誰かを置くなんてな。
しかも一人前に嫉妬なんてしやがって。あれは笑えたぞ。」

「ほつといでください。

あれはちょっと…横取りされたみたいで嫌だつたんですよ。」

「横取りねえ。…お前ももう父親かあ～。」

「たしかに、養父みたいなものですけど血は繋がつてませんよ。」

「俺には父親のように見えるけどな。」

「そうですか。」

父親か…。いまいち、ピンとこない。
だけどもし子供がいたら、こんな感じなのだろうか。この子の成長が嬉しくて、楽しみで。心配で、待ち遠しい。

「なあ、フヒイ。」

「なんですか？」

「…」の子は『風』だよ。」

「…。」

「風に舞う綿毛みたいにふわふわと飛んで行っちゃいそうだ。
飛んで行かないように見とくんだぞ。」

「言われなくとも。」

言われなくても、分かっている。

森の中で泣いていたこの子を見つけた。これもなにかの縁なのだ
ら。

「…あつはつはつはつはーやつぱりお前は父親だよ。
顔が父親だ！」

「どんな顔ですか。

早く帰りたいんで預けていたの返してください。」

「はいはい、分かったよ。」

ジョイドが苦笑しながら店の中に入つていいく。

ハルキを抱えなおすと、帽子がずれた。

この世界にも、黒髪黒眼の人間はいる。南のほうに多くて、前の
世界でいう『ラテン系』の顔立ちだ。だけど、私は東洋人のような
人にこの世界で会った事が無い。

それに、日本人の目はよく見ると茶色。この世界の黒眼は近くで

見ても、黒い。

遠くから見ると黒いのに、近くで見ると茶色なんて、この世界には存在しない。

どこの世界でも物好きはいる。目をつけられたら危ない。
…頼んでいた物、早めてもらつか。

「ほれ、これでよかつたよな。」

「はい。…あれ、これは？」

インクが入っている木箱の上に、買った覚えのない物があいてある。羽がいくつか付いた紐で、紐の両端には細工の施された銀色の金具が付いている。

「髪を結ぶやつなんだが、ハルキに似合つと思つてな。」

「いいんですか？」

「ああ、いいともさー

お前の娘は俺の孫だからな！」

その言葉に目を見張った。

この人は…。あんなに拒絕していた『俺』を、『息子』だと言ってくれるのか。

「…ありがとうございます。」

オババさまに、その内顔を出すと黙つておいてください。」

「おー、分かった。」

「ほれ、早くしないと日が暮れるぞ。」

「はい、それじゃあ。」

ハルを片手に抱えなおして歩き出す。
反対には木箱を持っているから、ちょっと重い。
この子との生活は、思っていたよりも心地よい。
だけど、ずっと一緒に暮らせるわけではない。私は、人であって
人で無い。だから、いつか別れの日が来るだろう。それは、絶対不
変の未来だ。

だけど、その日が来るまでは。

その日が来るまでは、見守つてみたい。

沢山の事を教えて、沢山の事を経験させてやりたい。

もしかしたら、前の世界に帰ってしまうかもしれないけど。
世界を越えて、離れてしまうかもしないけど。
同じ世界にいても、離れてしまつだらうけど。
それでも。

腕の中の存在を、この重さを離してしまわないように。落として
しまわないように。抱きしめた。

第10話・本の部屋（1）

フュイさんは研究者だ。

仕事柄、資料や参考文献といった本が多い。

だから、『本の部屋』という部屋がある。これは私が命名したんだけど、とにかく本が置いてある部屋だ。貴重なものはフュイさんの書斎に保管してあるんだけど、必要なくなつた資料は『本の部屋』にある。といふか溜めこんである。

『本の部屋』は、埃っぽい。だけど前よりはだいぶ綺麗になつた。私は『本の部屋』を掃除・整頓するのを日課にしてる。……だけどなかなか進まないんだよね。

「よし、今日も頑張るぞー！」

埃を掃いて、床を拭いて、本を整頓する。

手前から掃除してだいたい、3割ぐらいは終わつたと思つ。

奥の方には、天井に届きそうなぐらいまで積まれた本もある。こんなになる前に掃除しようよフュイさん。

「…」れ、どうよひ。

私の身長より高く積まれた本みて、思わずため息が出る。持ち上げるのは無理そつ。とりあえず、上の本から掃除しようかな。

一番上の本を取りついと手を伸ばす。

…『届かない。

つま先立ちになつてみると。
うーん…あともうひとつで届きそう。

「ふんこむつー」

変な掛け声が出た。ちょっと恥ずかしい。
思いつきつま先立ちをして、手を伸ばす。
あと、もーちょい…。

「取れた！……げつ。」

ぐらり、と本の山が揺れる。バサバサと音を立てながら本が降つ
てきた。

「ひへ、いたい…。」

頭に本が当たつて痛い。
涙目になりながらズキズキする頭を押さえる。私の周りには本が
散乱していて、掃除して整理した本も…。

「折角、きれいにしたのにまたやり直し…。」

なんか、掃除するのが嫌になつてきた。
とりあえず、埃が酷い本から綺麗にする。
埃を拭き取ると、霞んだ文字が見えてきた。
題名は『灰かぶり姫』。なんとなく、見た事がある。
たしかシンデレラは『灰かぶり姫』という意味ではなかつただ
らうか。

内容が気になつて読んでみると、読んだことのある話だった。

いままでも、あれ？と思うような本があった。偶然だと思つてい
たが、ここまで同じだと偶然だとは思えない。

第1-1話・本の部屋（2）

「フヨイさん、こんな本見つけたんだけど。」

書齋にいるフヨイさんに聞きに行つた。

フヨイさんは本を受け取ると、「よく見つけられましたね。」と言つた。

「その本、シンデレラだよね。なんでこちに同じ本があるの？
ほかにも読んだことのあるよつたな童話とか昔話とかがあつたんだ
けど。」

「昔、私もそれが気になつて調べた事があつたんですよ。
これを書いたのは『ジエア・ホロルス』という人でしてね、『見
覚えのあるタイトル、読んだことのある話』を多く書いている人で
す。

見つからない本はないと言われるほど巨大な図書館を作つたこと
で有名な人で…たしかその子孫が代々館長を務めているそうですよ。

「

その話を聞いて、私は一つの可能性を思ついた。

「もしかしてその人、私達と同じ世界から來たんじゃない？」

「そうだとしても、確かめようがありませんよ。もつ、200年以
上前に生きた人ですから。」

「そりなんだ…。

あーもう、なんかスッキリしないなーっ！」

見えそうで見えない。200年という長い歳月が『ジエア・ホロルス』を霧で覆い隠している。そのことにモヤモヤとして煮え切らない気持ちになっていると、なにか考えていたフェイさんが口を開いた。

「…今度、行つてみましようか『ホロルス図書館』。

今は論文が立て込んでいて無理ですが、これが終わったらじばらくは何も無いですし。」

「フェイさん、行つたことあるの？」

「ないですよ。行つてみようとは思っていたんですけど、なかなか行けなくて。ですから、この機会に行ってみようと思つんですけど。」

「…うん、私も行きたい。」

もしかしたら、私達と同じ所から来たのかもしれない人。もう会えないけど、私はその人が残した物を見てみたい。この世界で生きた形跡を見てみたい。

第1-2話・朱色が運ぶ知らせ

「え…友達つて事なの？」

「違います。知人です。」

ある日の午後。

やる事も終わって、私は庭で日向ぼっこをしていた。
そこに急にフェイさんが来て「人が来る。」と言われた。しかも、
何故か肩に鳥を乗せながら。

「そりなんだ…。

つていうか、フェイさん知り合いがいたんだね。」

「どういふ意味ですか。」

いやー、だつてさ。

この家に来るのは食料とか運んできてくれるお兄さんだけだった
し。

フェイさんの知り合いとが、訪ねてきたのつて一度もなかつた
から。

フェイさんもフェイさんで、ずっと研究ばかりだし。
あ、でもジョイドおじさんが知り合いになるか。

「前に言つていた、魔力を調べる道具をついでに持つてくれれる
そうですよ。」

「そういえば、そんな話もあったね。

それで調べれば、魔法が使えるようになるの?」

「訓練次第です。」

すっかり忘れていたけど、私にも魔力があるんだつけ。
魔力は魔法の源。魔力があると魔法が使える。
だけど、魔力には『属性』があつて、それを調べないと使えない
んだつけ。

「そつか、訓練次第か。
で、その鳥はどうしたの？」

鳥はずつとフェイさんの肩に止まっている。
大きさはインコぐらい。色は鮮やかな朱色だ。

「ああ、これですか。
この鳥は『エルク』といいます。手紙を運ぶ鳥ですよ。」

「へー、そうなんだ。」

エルクは小首を傾げたり、ちょこちょこと動いたりする。
それに合わせて長い尻尾がふりふりと揺れる。

「…ちょっと、触つても大丈夫?」

「大丈夫ですよ。」

ゆっくりと、驚かせないように近づく。
近づいても逃げない。人慣れしてるのかな?
まあ、フェイさんの肩で大人しくしてたし、人慣れしてるよね。
軽く頭を撫でてみる。

気持ち良やわらかに手を締める。

「かわいい。」

ぽわぽわしていて、ちょっと暖かい。
かわいいなー。

「ハルは、動物が好きなんですか?..」

「え?...うーん、嫌いではないよ。」

「そうですか。」

フロイさんがエルクに手を近づけると、ちゅーんと飛び乗った。
手乗りインコみたいだ。

「手紙の返事を書き終わるまで、遊んでいいですよ。」

「いいの?逃げたりしない?」

「大丈夫です。」

エルクが止まっている手に、私の手を近づける。
すると少し躊躇した後、私の手に飛び乗った。
軽い重み。

「ありがと、フロイさん。」

鮮やかな朱色の小鳥。

青い空に飛んだら、綺麗なんだね!うな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353v/>

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

2011年10月8日19時25分発行